
絶対に失いたくない

いぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対に失いたくない

【Nコード】

N0667T

【作者名】

いぬ

【あらすじ】

性転換モノ。こんなの絶対おかしいよって思う人はスルー推奨。ちなみにピクシブの方にもいくつか載せてます。今回も載せる予定。

(前書き)

とある場所のとある作品に影響されてるので巴マミ↓巴マミヤとな
っております。

性転換注意。

そして性転換注意です。

あといぬから発せられる毒電波にも注意しましょう。

「さ、どうぞ上がって。といっても、何もない部屋だけね」

「わ、凄く豪華な部屋だ」

「……邪魔します」

そう言われ私——暁美ほむらと鹿目円はマンションの一室に招待された。

円が豪華というのも仕方のないことだと思う。私もここへ通されたのは別の時間軸から数えてもこれが二回目だが、それでも圧倒されるものだった。

まず玄関を抜けると左右に部屋がある。こちらには入ったことはないけれど、おそらくベッドルームとバスルームだろう。それを抜けるとフローリングの大きな部屋。中央にシックなカーペットが敷かれ、その上に丸テーブルが置かれている。テーブルの上にはお洒落な過敏に花が一輪添えられている。この部屋の左右にはロフトへと上がる階段があり、そのロフトも小奇麗に飾られている。物置としてではなくインテリアの一部として使っている様だ。

更にそれを抜けて奥へ進むと一番大きな部屋に繋がっている。

L D Kの大きな部屋は一面がはめ込み式のガラス窓になっていて、そこから町並みが一望できる。その部屋のリビングには三角形のガラステーブルが敷かれたカーペットの上にあり、テーブルの上にはティーポットが置かれていた。この部屋にもロフトへと上がる階段があり、上部で先ほどの部屋と繋がっている様子だった。

そのリビングに案内された私達は各々テーブルに着くと部屋の主が紅茶を用意してくれるのを大人しく待つことにした。

しばらくして柑橘系の香りとケーキの甘い香りを両手に持ち、部屋の主——巴マミヤが笑顔で来た。

私は完全に失念していたが、どうやらこの時間軸はまどか以外の

人物にも変化をもたらしている様だった。というのも、今回の時間軸で私はまだ私以外の魔法少女と出会っていなかったのだ。

確かにまどかが円という別人で存在はしていたが、美樹さやかが今まで通り女子生徒であったこと。そして他のクラスメイトにも男女の転換が起こってはいなかった。その為、私はこの世界はまどかだけが男性になってしまっている世界だと思い込んでしまっていた。

バマミヤもまた、私が勝手に女性だと思い込んでいた一人だった。今日もまた”何故か”魔女の手下に襲われてしまい結界に迷い込んでしまった円を助けるべく、そして魔法少女としての責務を果たそうとした矢先、颯爽と現れたのがバマミヤだった。

精悍な顔立ちにモデルでも通用するほどの長身。だがその肩幅は狭くスレンダーな体躯。線は細いが円のような華奢な印象は無い。マスケット銃を巧みに操り手下を殲滅していくその姿は、私の知っているバマミと同様のものであり、見とれるほどに美しいものだった。

バマミヤは私の姿をみて非常に驚いた様子だったけれど、私が魔法少女であることを明かすと、自らもキュウベえと契約した魔法少女——いや、魔法少年と呼ぶべきか——であることを告げ、そして折角の出会いだからということで部屋に招待され現在に至る、というわけだ。

しかし、こうして見てみるとこの世界は私が思っている以上に変化してしまっているのかも知れない。現在分かっているのはまどかとバマミが男性になっていることと、美樹さやかは今まで通りであることだ。そしてあと一人の魔法少女佐倉杏子についてだけれど、こちらもまだ私は出会っていないから確証は持てないが、美樹さやかが赤毛の男性と肩を並べて歩いていたという噂話を耳にしている。もしかするとそちらも男性になっているのかも知れない。

「ほむらちゃん、大丈夫？」

不意に円が私の顔を心配そうな表情で覗き込んでいた。どうも私が考え事をしていたのを具合が悪いと勘違いしている様子だ。

「大丈夫よ。問題ないわ」

「そうかい？　あまり無理はしない方がいいよ」

私にそう言うのは円ではなく紅茶を淹れる巴ミヤだ。

「唯でさえ僕達は怪我をしやすい環境に置かれている。無理を重ねて判断を見誤れば命を落とす事だってある」

真剣な眼差しで言う姿は調和や協調といった、普通の魔法少女には見られない仲間を思いやる姿勢、巴ミヤそのものだった。

円にしてもそうだったけれど、やはり見た目や性別が変わろうとも、その人物の性質や根本までが変わってしまうわけではないようだ。

「まあ何にせよ、二人が無事で良かったよ。ここで怪我なんてさせちゃったら先輩としてメンツが立たないからね。さあどうぞ、召し上げ」

そう締めくくると同時に三人分の紅茶を入れ、切り分けたケーキを小皿に分け、私達の前に置いてくれた。ケーキを前に目を輝かせる円に私は何故か不安になる気持ちを抑え、頂くことにした。

「凄く甘くて美味しいです。これ、ミヤさんが作ったんですか？」

「うん、まあね。ケーキ作りが趣味の男つてのもどうかと思うけど、一人でいることが多いから、ね」

「えー、一人でなんでもつたいないですよ。ボクでよければ毎日でも食べに來ますよ？」

それは本気で言っているのだろうか。いえ、きっと本気で言っているのでしょうね。この子は……。

「ハハっ、大歓迎だよ。どうせ一人で暮らしているし、遊びに來る様な友人もいないからね」

どこか寂しそうに言う巴ミヤだが、それも仕方の無いことだろう。

魔法という異質な力を持ち、魔女という異形のモノと戦う使命にある私達に普通の友人など作れるはずもない。黙って隠し通そうとしても、いつかは露呈し破綻する。そういうものだ。

そしてもう一つ。バマミヤが友人を作れず、かつ部屋にも呼べない理由はこの内装だろう。

なんと言えはいいだろうか、とりあえず”可愛らしい”のだ。以前にバマミの部屋を訪れたことのある私が、今のこの部屋を見ても何の違和感も感じないのだ。趣味が一緒といえば聞こえは良いが、それが男子生徒の趣味として相応しいかどうかは言うまでもない。

やはり寂しさを紛らわすためだろうか。

など、ソファに飾られたクマのぬいぐるみを見ながら余計な詮索をしていた私に苦笑いが聞こえた。

「アハハ……、やっぱ変かな？　こういうの持ってるのって」

「そんなことはありませんよ。可愛くていいと思いますよ」

返答に困っていた私の代わりに円がフォローをする。

「ボクの部屋にも抱き枕に使ってるぬいぐるみがありますし、普通ですよこれくらい」

……いや、それともうかと思うのだけれど。

「そ、そうかな？　でもこういうの持ってる気持ち悪がられないかな？」

「大丈夫ですって。それにぬいぐるみ抱いて寝ると気持ち良いんですよ」

……微妙に論点がずれてきているわ。

「ほむらちゃんもそう思うよね？」

「……………そうね」

そう搾り出すのがやっとだった。

そうしてしばらく円とバマミヤが談笑し、私が時々相槌を打つ時間が続き、いつしか窓の外には夜景が広がるようになっていた。

「あっと、ゴメン。少し引き止めすぎちゃったみたいだ」

バマミヤはテーブルを片付けると家まで送ると申し出てきた。私は一人でも大丈夫だからと断ったのだけれど、夜道を女の子一人で

歩かせるわけには行かないと結局押し切られた。

マンションを出ると私達三人は肩を並べるようにしてまずは円の家へと向かうことになった。

すでに日は落ちているのだが、円はすでに両親に連絡をしているらしく少しくらいなら遅くなっても大丈夫といい先に私を送ろうとしたのだけれど、私より円を一人にする方が不安だという意見が私とバミミヤの間で一致したため、円を先に送ることになったのだ。

そして円を無事家まで送り届け、その際に円の母親から意味深な視線を飛ばされるが、それを何とかかわし、私は現在バミミヤと二人で星空の元を歩いている。

しばらくは特に会話らしい会話はなかったのだけれど、唐突にバミミヤが口を開いた。

「暁美さんは、魔法少女になってから長いのか？」

「そうね、もう随分経つわ」

本当に、随分長いこと時間を彷徨っている気がする。時間にすればきっとバミミヤや佐倉杏子の方が長いのだろうけど、その間に経験した事の濃さで言えば、私が間違はなく一番長いのだろう。いつ終わるかも知れない出口のない迷宮。それは私の感覚をおかしくするのに十分な期間だった。

「そうか。随分と辛い経験もしてきたみたいだね」

「……そうね」

バミミヤは空を仰ぐと何かを考え込むように黙ってしまった。私から話しかけることも無いのでそのまま歩いているといつしか私のアパートの前まで来ていた。

私はそこでお別れだと思っていたのだけれど、いつまで経ってもバミミヤが離れる様子はなく、ついには私の部屋の前まで着いてきてしまった。

「もう十分よ。これ以上先に貴方を入れるつもりはないわ」

ここから先は私の領分だ。確かに部屋に招いてもらった恩のようなものはあるけれど、それをここで返そうとは思わない。

「あ、そうか。ゴメン、つい付いてきちゃった」

アハハと誤魔化すように頭を掻くバマミヤだけれど、それでも別れの言葉を言う様子はまだない。いぶかしむ私に、バマミヤは不意に真摯な表情を見せ、言った。

「暁美さん。良かったら、もし良かったらでいいんだけど、僕とチームを組んでくれないかな？」

それは今までのように個人で魔女を狩るのではなく、お互いに協力して戦おうという申し出。だけれど、

「それが無理な相談であることは貴方にも分かっているはずよ。ソウルジェムの穢れのこと、知らないわけではないでしょう？」

「……」

魔法少女が力を発揮する度にソウルジェムには穢れが溜まってきた。それが限界まで溜まるとソウルジェムはグリーンフシードへと変化し、私達は魔女になり肉体的にも精神的にも死亡する。それが私達魔法少女を縛る制約だ。

今のバマミヤがそれをどこまで知っているのかは分からないけれど、その申し出がどれだけ難しいものであるかは少し考えれば分かることだ。

「なら、それだったら、僕が狩った魔女のグリーンフシードは暁美さんが使っていい。それならどうかな？」

「それこそ無理な相談だわ。貴方は死にたいのかしら？」

私はバマミヤの目を真正面から見据え、睨む。

魔女と戦うのに魔力は必要不可欠だ。それを消耗したまま浄化もせずに戦おうなどと自殺行為に等しい。しかもただ死ぬだけでなく、周囲に多大な損害を与える死だ。それにバマミヤの死が円にどれほどの影響を与えるかなど考えるまでもない。

「私は貴方と組むつもりは毛頭無いわ。そもそも私と貴方とでは戦う目的も理由も違う」

「え？」

「私が戦う理由は”まどか”のためだけよ。他の事なんてどうでも

いいわ」

あの子を救うため。

まどかとの約束を果たすため。

ただそれだけのために私は戦い続けている。

「暁美さん、君は鹿目くんのこと……好きなのかい？」

「……ええ、そうね。好きよ。私はまどかが好き。だから守りたい。絶対に失いたくない」

きっと巴ミヤと私の言っている人物は違う。でもそれは些細な事に過ぎない。だってあの子は姿形が違えども、同じ”まどか”であることに違いはないのだから。

巴ミヤはそれ以上何も言うてくることはなかった。だから私は「送ってくれてありがとう」とお礼だけし、扉を開け玄関に入り閉めようとした。

しかし、その隙間に靴が入り込み扉が閉まるのを妨害した。

閉まりかけた扉に手を掛け、再び私の前に立つ。私は不快な表情を隠そうともせず睨もうとしたが、巴ミヤのあまりにも真剣な眼差しに息を飲んでしまった。

「僕は――僕も君を失いたくない」

「っ!？」

「同じ境遇だからとかだけじゃなくて、もっと君を大事にしたいと思っている」

「何を、言っているの？」

後頭部を殴打されたような気分だった。思考がフワつき、上手く考えがまとまらない。

「だから僕は君のことが、暁美ほむらのことが……」

「止めて!」

瞬間。全ての動きが止まり、世界は静寂に包まれる。

私は巴ミヤの身体を突き飛ばすと扉を閉め、鍵とチェーンを掛ける。

そうして再び動き出した世界、扉の向こうで何かがこけた様な音

が聞こえた。

心臓の動悸が激しくなり、頬を大粒の汗が流れ落ちる。唇が、肩が足が震え、身体全体に力が入らなくなり玄関にへたり込んでしまう。肩を抱くように身体を丸めるが、それでも震えが止めることはない。

「どうして……」

どうしてこんなにも怖いのだろう。

バミミヤの申し出は本来ならば嬉しいものであるはずなのに。今の私には恐怖しか感じない。

きっとそれは決して叶うことの無いものだと思っただけで私の中で悟ってしまっているからなのだろう。考えないように、考えないようにしてきた事。

私がこの世界で目的を達成出来なかった時、それはこの世界との別れの時であり、全ての関係が等しく清算される時。

私がこの世界で目的を達成出来た時。それは”まどか”との永遠の別れの時であり、私の全てが消え去ってしまう時。

そしてそうなった時、きっと私は魔女となり、世界を黒く染めることになる。それが私には分かっている。

そんな中でそのような関係を築いてしまえば、どう転んでも絶望しかないこの世界で一体何を指針に生きていけば良いのか分からないようになってしまう。

だと言うのに、

「どうして……」

どうして先ほどから円の顔が頭をよぎるのだろう。

私を守りたい、失いたくないはずのまどかより先に、円の顔が浮かんでしまう。

私にはそれがどうしても、どうしようもなく、怖かった。

続きなんて、あるわけない。
こんなの絶対おかしいよ。

早い話が、終わりです。

(後書き)

もう何も怖くない（・ω・）キリッ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0667t/>

絶対に失いたくない

2011年5月7日00時40分発行